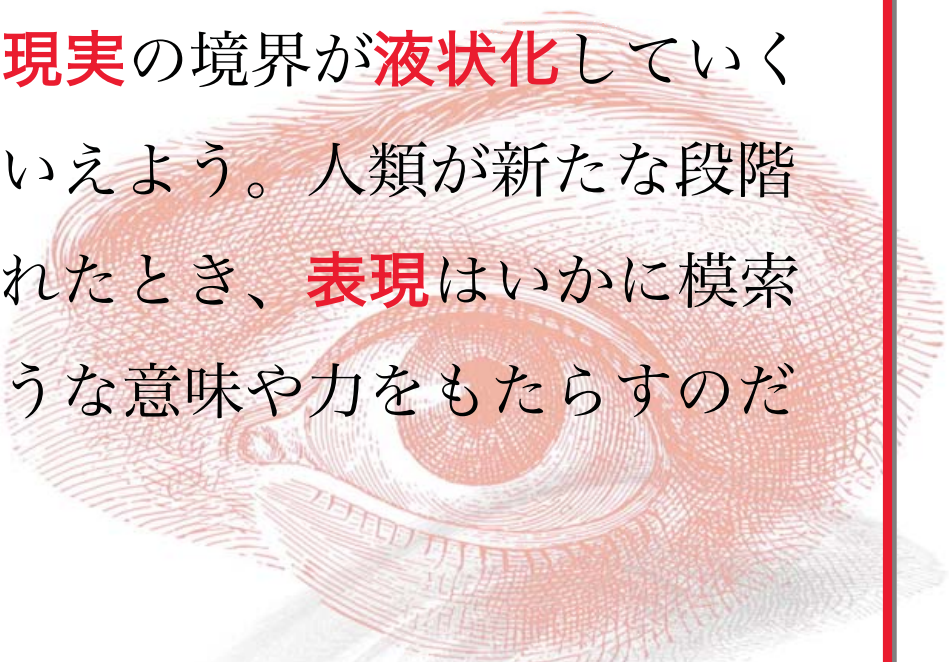
《企画展示》

「不安」から照らす「生」の諸相×藤田直哉

虚構と現実［SFカラ、震災マデ］

社会への適応限界速度を超えた情報科学技術の発展は、我々に利便性だけではなく**「不安」**をも同時にもたらすとともに、身体をもつ人間の**「生」**を揺るがし、また際立たせている。 SF作品の中で予告されてきたポスト情報化社会が到来しつつある現代は、**虚構**と**現実**の境界が**液状化**していく渦中にあるといえよう。人類が新たな段階に足を踏み入れたとき、**表現**はいかに模索され、どのような意味や力をもたらすのだろうか。



主催：不安と生の研究会・愛知県立大学長久手キャンパス図書館
共催：愛知県立大学全学同窓会

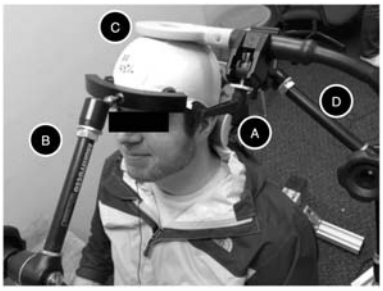
期間：2019年11月11日(月)～12月10日(火)
会場：愛知県立大学 長久手キャンパス図書館　1階ロビー

境界が曖昧化する生、液状化する身体

藤原　智也
（教育福祉学部 教育発達学科）

ここ四半世紀のSFでは、人間と機械の対立ではなく、人間と機械の境界が曖昧化していく様子が描かれてきた。すなわち、「機械的になる人間」と「人間的になる機械」である。ポスト情報化社会を迎えつつある現在、このようなSFで描かれてきた世界は、部分的に現実化しようとしてきている。

情報科学や認知科学の研究成果を基礎として、人間の脳内機能を高度にシミュレーションする技術が開発されてきた。我々は、身体を離脱して、情報世界へ完全にダイブする世界を、もはや非現実なおとぎ話だと一蹴することができない段階に足を踏み入れている。



RP.Rao *et al.*, (2014) *A direct brain-to-brain interface in humans.*

R.ウォシャウスキー&A.ウォシャウスキー『マトリックス』(1999)

しかし一方で、身体の感覚が液状化していることと対比するように、身体に対する要求が高まっているかのような現象も見られる。データを消費するだけではなく、我々は身体を介した消費へむけて駆り立てられているようだ。

生の境界が曖昧化していく中で、これからの未来はどのような可能性を持ち得ているのか、そこでは現状に対するどのような変化を我々にもたらすのか。

参加型芸術の例：ローカルアイドルのコンサート、地域芸術祭

Googleによる自動運転Waymo

そして「私のふるさと」は端的に存在しない。なぜならそれは、失われたものとして生まれたのだから。

（西谷修「ふるさと、またはソラリスの海」「現代思想」1990. 8）

宮崎 真素美（日本文化学部国語国文学科）

寺山修司歌集『田園に死す』— 〈偉大な質問になりたい〉、私 —

■青森のふたり 愛し、憎む 寺山修司×太宰治 — 模写された故郷

■もしかしたら、私は憎むほど故郷を愛していたのかも知れない。（寺山修司「跋」『田園に死す』1965）

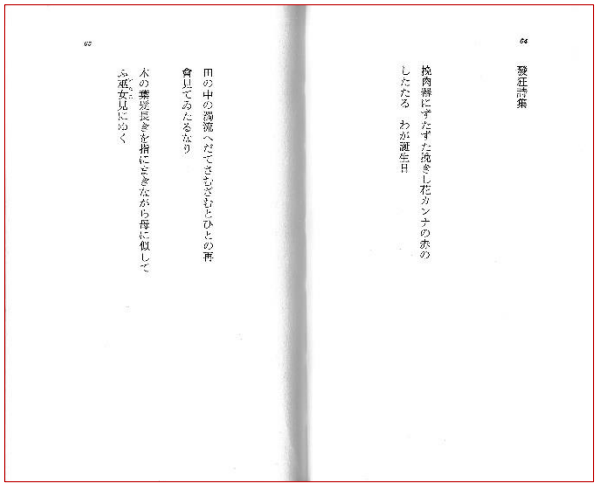
■数年前、私は或る雑誌社から「故郷に贈る言葉」を求められて、その返答に曰く、汝を愛し、汝を憎む。

（太宰治「序編」『津軽』1944）

■大工町寺町米町佛町老母買ふ町あらずや/つばめよ（「恐山 少年時代」『田園に死す』）

■本町、在府町、土手町、住吉町、桶屋町、銅屋町、茶畑町、代官町、萱町、百石町、上鞘師町、下鞘師町、鉄砲町、若党町、小人町、鷹匠町、五十石町、紺屋町、などといふのが弘前市の街の名である。それに較べて、青森市の街々の名は、次のやうなものである。浜町、新浜町、大町、米町、新町、柳町、寺町、堤町、塩町、蜆貝町、新蜆貝町、浦町、浪打、栄町。（「序編」『津軽』）

■切断と余白、接続の不安 — 屈折のレイアウト



■亡き母と、死なぬ母 — 繰り返す喪失と存在の高まり

一年たてど 母死なず 二年たてども
母死なぬ 三年たてども 母死なず 四
年たてども 母死なぬ 五年たてども
母死なず 六年たてども 母死なぬ
十年たちて 船は去り 百年たちて 鐵
路消え よもぎは枯れてしまふとも 千
年たてど 母死なず 萬年たてど 母死
なぬ

（「子守唄 長歌 修羅、わが愛」抜粋）

亡き母の眞赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽
毛抜けやまぬなり

亡き母の位牌の裏のわが指紋さみしくほ
ぐれゆく夜ならむ

トラホーム洗ひし水を捨てゆく眞赤な椿
咲くところまで

（「犬神 寺山セツの傳記」抜粋）

■田園のふたり 喪失と獲得のアイロニー 寺山修司×アンドレ・ジイド — 反転する現実

■あなたのおかげで視力が与えられたとき、目のまえに開けた世界は、あたしが想像していたより、ずっと美しいものでした。ほんとに、日の光がこうも明るく、風がこうもきらきらかで、空がこうもひろびろしていようとは、夢にも思っていませんでした。けれどまた、人間の額がこうまで憂いをたたんでいようとも、けっして想像していませんでした。で、お宅にあがったとき、一ぱん先にあたしの目についたものが何だったか、おわかりになって？……ああ、やっぱり思いきって申しあげなくてはならないわ。そのとき、まずあたしが見たのは、あたしたち二人のあやまちでした、二人で犯した罪でした。いいえ、反対なさらないで下さい。それより、キリストのあのお言葉を思い出して下さいまし――『もし盲目なりせば、罪なかりしならん』。ところが今では、あたし目が見えるのです。……

（神西清訳 アンドレ・ジイド『田園交響楽』抜粋『新潮社 世界文学全集26』一九六〇）

■ある女、まなこ裏がへりて、外のこと見えずなりたり。瞠らむとすればするほどにおのが内のみ見え、胃や腸もあらはなる内臓の暗闇、あはう烏の啼くこゑのみきこゆ。

女、かなしめども癒えず、剃刀もて眼球をゑぐり出し、もとのやうに表がへさむとすれど、眼球に表なし。耐へがたきまま表なしの眼球を畑に埋めたり。

女、四十にして盲目のままはてしが、畑には花咲かず。

ただ、隣人たちのみ、女を世間知らずとして遇せしと傳ふ。

鶏頭の首なしの莖流したる川こそ渡れ
わが地獄變

（「新・病草紙 眼球のうらがへる病」）

失われた場所としての虚構――江戸川乱歩「押絵と旅する男」

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

例えば、アニメやゲームの美少女キャラクターを「嫁」と呼ぶオタクは、その呼称に誇張やアイロニー的な側面はあるとしても、実際に存在する。『ラブプラス』という CG キャラクターとコミュニケーションをするゲームにバグが発生し、ホワイトデーのイベントがうまく動かなかったときに「身体をもがれたような痛み」を感じるという表現がなされたし、実際に苦痛を行動で表現するほどであった。そこにある、身体、現実、言語、他者の認識は既に変化している。

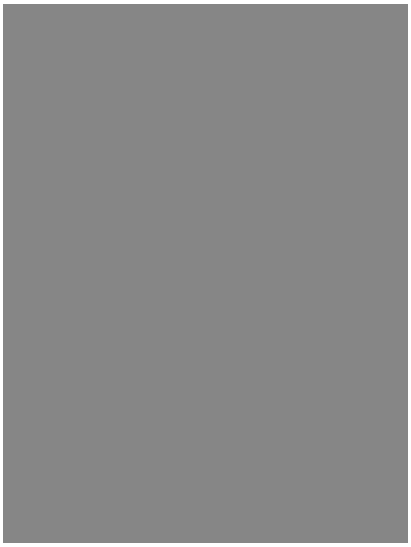
藤田直哉『虚構内存在―筒井康隆と〈新しい《生》〉の次元』（2013 年、作品社）

◆江戸川乱歩「押絵と旅する男」（1929 年）

…押絵細工の美少女に恋をして自らも押絵のなかに入り込んでしまった男の物語。語り手の「わたし」は汽車のなかで奇妙な紳士からその押絵を見せられる。

老人も、双眼鏡の世界で生きていたことは同じであったが、見たところ四十も違う若い女の肩に手をまわして、さも幸福そうな形でありながら、妙なことには、レンズいっぱいの大きさにうつった彼のシワの多い顔が、その何百本のシワの底で、いぶかしく苦悶の相を現しているのである。

双眼鏡で押絵を覗いた「わたし」は、押絵細工の美少女と寄り添う幸福な姿とともに、自分だけ老いてしまう男の苦悶の表情を見逃さない。現実と虚構が溶解しながら、そこに走る亀裂がたしかに描かれている。



橘小夢による「押絵と旅する男」画

◆非在と虚構、そして震災――描かれない〈浅草〉

震災により崩潰した浅草十二階

もう一つこの作品で興味深いのは、浅草の描き方である。男が押絵のなかに入ったのは 1895（明治 28）年、浅草での出来事として語られている。凌雲閣（浅草十二階）をシンボルとした繁華な浅草の町を作品は描くが、「押絵と旅する男」が発表される 6 年前の 1923（大正 12）年、関東大震災により、凌雲閣が崩壊するなど浅草は壊滅的な被害を受けている。この小説が発表される 1929（昭和 4）年は、浅草の復興が進んでいる時期であり、翌年には大々的に〈帝都復興祭〉も開催されている。実は同年には、復興が進む新しい浅草を描く川端康成「浅草紅団」（1929 年）という作品も発表されているが、かつての浅草を描く「押絵を旅する男」では、復興祭を控えた浅草を描くことはない。眼前にある現実の浅草を描かない乱歩。〈復興〉をゴールとして浅草を祝祭的に描くのではなく、〈すでに失われてしまったもの〉を回想的に虚構のなかで哀惜するそのあり方は、この作品で押絵（虚構）のなかに入り込む男の姿とも重なるようだ。

不安と生の研究会

こころの科学と「虚構」

田上　恭子（看護学部）

❒　心理学は仮説構成概念を扱う学問である

「現象を構成概念で記述すること，つまり現象に名前をつけることは現象の発見そのものであり，構成概念なくしては心理学のみならず，多くの科学はその存在自体なかったであろう」（渡邊，1995，p.1）

「名前をつけられることで，実体であるかのように思えてくる」（野村，2016，p.188）

❒　認知心理学の誕生―“認知革命”

行動主義の限界，情報科学やサイバネティクス，コンピュータの普及などの影響を受け，認知心理学が成立しました。「情報」という，行動主義からみれば実体のないものが，客観的，数量的，科学的に研究できるようになったことによるところが大きいとされています。

「こころ」を科学する学問の歩み（中島，2006，p.23）

❒　記憶のフィクション性

https://www.ted.com/speakers/elizabeth_loftus

記憶は，ビデオテープや書類キャビネットに保管されたファイルとは異なり，構成的・再構成的であると心理学では考えます。つまり，ある出来事についての記憶は，それが形成されたとき，そして時間を経たその後の両方の時点で，客観的事実とは違ってくるのです。

“Memory—like liberty—is a fragile thing”

（TED Conference 2013「How reliable is your memory?（記憶が語るフィクション）」―Elizabeth Loftus）

1990 年代，抑圧された虐待などの記憶の回復による訴訟が欧米で増加し，「回復された記憶」と「偽りの記憶」を巡る論争が起こりました。中心となった論点は，抑圧され，後に心理療法などにより回復したとされる記憶の真偽でした。

「凍てついた心の表面を溶かすもの，地下に埋もれた記憶を意識へと誘うものは何か？ 長い年月，記憶はどこに隠れていたのか？ 本物のように見え，聞こえ，感じられはする。だが，蘇生された記憶が現実と虚構，夢と想像，恐怖と欲望の汚染された混合物でないと，どうして分かるのか？」（Loftus & Ketcham, 1994　仲訳　2000，p.74）

❒　「虚構」構築の心理学的意義

社会構成主義（言葉やそれを用いた会話を通じて，現実が社会的に構成されていると見なす考え方）の影響を受け，語りによって構成される現実や，語りがもたらす意味を重視する心理療法を総称してナラティヴ・セラピーと呼びます。

「会話こそが現実をつくりますから，会話が変われば現実も変わるわけです。この考え方に基づくならば，心理療法は，会話の生成や変化を通じて，現実を生成し，変化させる営みになります」（野村，2016，p.188）

ナラティヴ・セラピーでは，“物語的真実”と“歴史的真実”の区別が提唱されています。歴史的真実では，クライエントの語りが現実に起きた出来事という事実にもとづいているという前提に立っています。一方，物語的真実とは出来事やそれに対する情緒的反応を連続性・親和性・適合性をもって説明しようとする試みによって成立するものとされています。

「心理療法の実践は，歴史的真実の探求を目指すものではないということになります。むしろ，クライエントが物語的真実に到達し，そこで新たなストーリィを作り出せるように援助する企てであるとみなすことができます」「“回復された記憶”の正確さをめぐる議論は，心理療法においてクライエントとセラピストが構成するストーリィの真実性について，どのような立場を取るかに大きく依拠しています」（McLeod, 1997　下山訳　2007，p.163）

References

Loftus, E., & Ketcham, K. (1994). *The myth of repressed memory*. New York: St. Martin's Press.（ロフタス, E.F.・ケッチャム, K.　仲 真紀子 (訳) (2000). 抑圧された記憶の神話―偽りの性的虐待の記憶をめぐって―　誠信書房）

McLeod, J. (1997). *Narrative and psychotherapy*. London: Sage.（マクレオッド, J.　下山 晴彦 (監訳) (2007). 物語りとしての心理療法―ナラティヴ・セラピィの魅力　誠信書房）

野村 晴夫 (2016). ナラティヴ・アプローチ　藤田 哲也 (監修) 串崎 真志 (編) 絶対役立つ臨床心理学 (pp.179-192) ミネルヴァ書房

中島 義明 (2006). 情報処理心理学―情報と人間の関わりの認知心理学―　コンパクト新心理学ライブラリ 13　サイエンス社

渡邊 芳之 (1995). 心理学における構成概念と説明　北海道医療大学看護福祉学部紀要, *2*, 1-7.

お天道様もカメラ付き AI 信用システムも見ている時代

虚構を現実にするツール登場

情報科学部　奥田隆史

“お天道様が見ているよ”. 大人が子供をしつけるときに使う決め台詞です. この台詞がマナーや倫理観の教育で果たしてきた役割は大きいと思います. ただし私はお天道様の実物を見たことも, 見た人に会ったことはありません. “お天道様が見ているよ”は虚構（Fiction, 作り話）なんだろうが, お天道様は何でもお見通しの畏れ多きもので, 天空のどこかにいるんだろうなという感覚があります. お天道様はいわば虚構の監視者なのかもしれません.

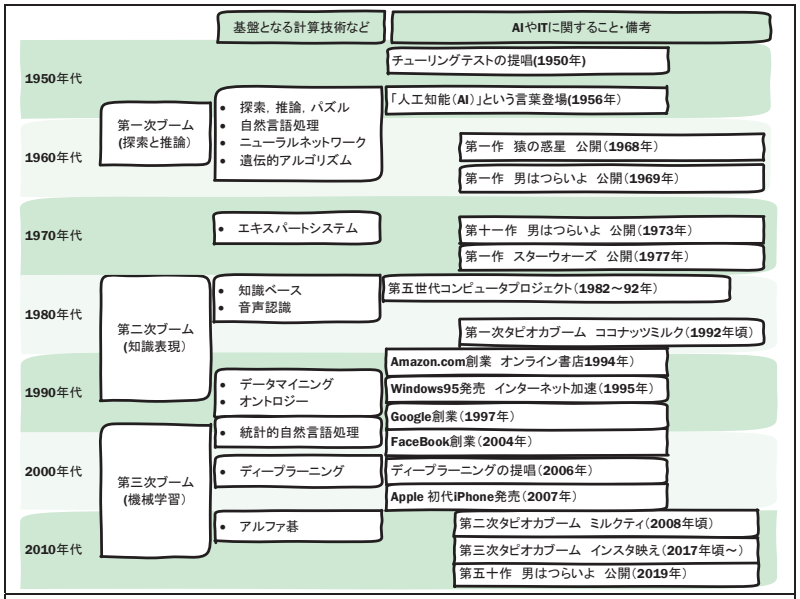
さて現在, **第三次「人工知能（AI）」ブーム**と呼ばれています. このブームの背景には, ディープラーニングなどの機械学習のアルゴリズム（計算方法）が発見されたということと, アルゴリズムを実装するためのインターネットやクラウド, ビックデータ, IoT などの情報科学技術が広く普及したことがあります. 多数の街角カメラから, SNS のやりとりから, 様々なデータや情報が**自動的にどこかに集められ**ていきます. AI はそれらのデータを活用し, 様々な分析をします.

良いか悪いかは別として, ある国では, AI を使って個人信用評価システムを実現しています. その国では人々は個人信用評価を悪くしないことが行動規範となり, 結果的にマナーや倫理観が向上しているそうです. 人類は, **虚構であるはずのお天道様を, AI というツールを使って創造しつつある**のかもしれません.

私は見直している. 遊ぶ・歩くということを.

余談　2019 年という時代

- **“お天道様が見ているよ”**：この決め台詞の使い方は『男はつらいよ　寅次郎忘れな草』(第 11 作, マドンナ:浅丘ルリ子, 1973 年）を観るとわかります. ちなみに年末には 50 作目の最新作『男はつらいよ　お帰り　寅さん』が公開されます.
- **第三次「タピオカ」ブーム**：このブームの背景にも, スマホと SNS という情報科学に関連するテクノロジーが可能にした「インスタ映え」もあるようです.



これまでの人工知能ブームとその時代

関連書籍

現代社会を予想していたフィクション

[1] 星新一, 声の網, 角川書店, 1970.

[2] ジョージ・オウエル, 1984, 早川書房, 2009.

現実の世界　その 1　人工知能・IT について

[3] ユヴァル・ノア・ハラリ, ホモ・デウス　テクノロジーとサピエンスの未来　上・下, 河出書房新社, 2018.

[4] レイ・カーツワイル, ポスト・ヒューマン誕生－コンピュータが人類の知性を超えるとき, NHK 出版, 2007.

[5] 松尾豊, 超 AI 入門―ディープラーニングはどこまで進化するのか, NHK 出版, 2019.

[6] エドワード・O・ウィルソン, ヒトはどこまで進化するのか, 亜紀書房, 2016.

[7] 新井紀子, AI vs. 教科書が読めない子どもたち, 東洋経済新報社, 2018.

[8] 若林恵, さよなら未来―エディターズ・クロニクル, 岩波書店, 2018.

[9] 梅棹忠夫, 村上陽一郎, 八巻磐, 河村智洋, 長谷川寿一, 池田謙一ほか,IT と文明―サルからユビキタス社会へ, NTT 出版, 2004.

現実の世界　その 2　見直してみませんか遊ぶ・歩く

[10] ホイジンガ, ホモ・ルーデンス, 中央公論新社, 1973.

[11] 加藤則芳, ロングトレイルという冒険　－「歩く旅」こそぼくの人生, 技術評論社, 2011.

[12] 為末大,「遊ぶ」が勝ち　『ホモ・ルーデンス』で, 君も跳べ!, 中央公論新社, 2013.

[13] レベッカ ソルニット, ウォークス 歩くことの精神史, 左右社, 2017.

[14] ロバート・ムーア, トレイルズ（「道」と歩くことの哲学）エイアンドエフ, 2018.

[15] トリスタン・グーリー, 失われた、自然を読む力, エイアンドエフ, 2018.

ヨーロッパとイスラム

「イスラム禍」という虚構／「多文化共生」という虚構

愛知県立大学外国語学部　　原　潮巳

現代ヨーロッパ最大の課題として、中東・アフリカからの移民、特にイスラム系移民にどう対処するかが挙げられよう。一方に、いわゆる右翼・極右の立場から、それを「イスラム禍」と捉え、ヨーロッパ文化文明が脅かされ、やがてはイスラムに支配されるに至るのではないかという主張。もう一方に、人道的な立場から彼らを積極的に受け入れるべきであるとし、更には非ヨーロッパ文化・文明の流入によって、「多文化共生」による新たなヨーロッパの在り方を期待する主張。

多くの場合、前者の主張は右翼・極右の妄想による「虚構」に過ぎないと見なされている。2011年7月のノルウェー連続テロ事件は、この「虚構」に囚われた異常者の犯行であるとされた。しかしながら後者の主張もまた、植民地主義と人種差別に対する言わば過剰な罪悪感が生み出した、現実とは程遠い「虚構」なのではないだろうか。2015年1月のシャルリー・エブド襲撃事件、同年11月のパリ同時多発テロ事件を経験したヨーロッパにおいて、「多文化共生」に対する不安や疑問が沸き起こってくるのは不可避であると言えよう。ミシェル・ウェルベックMichel Houellebecq (1958-)の『服従』*Soumission*は、2022年のフランス大統領選でイスラム政権が誕生するというディストピア小説で、全くの偶然ながらシャルリー・エブド襲撃事件当日に発売され、フランスのみならずヨーロッパ各国でベストセラーとなった。

作家ルノー・カミュ(1946-)は、日本ではほとんど未紹介ながら、これまで多彩な作品を著し、20世紀後半のフランス前衛文学の担い手の一人として、高い評価を受けて来ていた。だが、2000年以降、「イスラム禍」を警告する積極的な政治活動を行ったことによって、現在は極右のデマゴーグと見なされ、文学の世界からはほとんど追放された状態にある。移民・難民が大量に押し寄せるために、社会的にも文化的にもヨーロッパの伝統がアフリカ・イスラム的なものに取って代わられつつあるという彼の主張、「大交代」Grand Remplacementは、ヨーロッパの言論界で現在最も論議を呼んでいる概念となっている。そしてこの概念は今や独り歩きを始め、例えば2019年3月のニュージーランド・クライストチャーチにおけるモスク銃撃事件の犯人に影響を与えたとされる。

現在の日本に目を転じれば、未だに「単一民族国家」という「虚構」に囚われ、こうした問題はまだ他人事に過ぎないと感じている人も多い。だが、実際は世界最大のイスラム世界である東南アジア地域に隣接し、外国人研修制度という事実上の移民受け入れを行う一方、難民申請者の人権を全く無視するというような、世界の常識が全く通用しない状況が生じている。ヨーロッパとイスラムの関係は、日本も直面せざるを得ない問題であり、大いに学ぶべきものがあると言えよう。

１０年代の批評：SF・地域アート・震災、そして・・・

藤 原　智 也
（ 教育福祉学部 教育発達学科 ）

2010年代は、日本にとって混迷の時代でした。デフレ不況、IT革命、孤独化などによる現象が人々の生活を変え、そのこと自体が「当たり前」化しました。それと同時に、東日本大震災（2011年3月11日）によって、「人為」を超えた現象を引き受けざるを得ない存在としての我々、そして福島原発事故という「人為」による悲劇をも引き受けざるをえない存在としての我々、という自覚が迫られました。このような時代を私たちはどのように認識し、未来に向けた生を営むことができるのでしょうか。

藤田直哉氏の批評活動は、１０年代が抱える特異性への強い意識から生まれています。そこで繰り返し扱われているのが、「虚構と現実」という枠組みから１０年代を照射するという手法です。藤田氏の仕事の範囲はSF文学やサブカルチャー、地域アート、震災などにわたり、その中で政治や経済、科学技術、身体や生死といった人々の在り方の変化について論じられています。全体主義的なロマン主義への警鐘、新自由主義のゾンビ化、「戦場」を想起させる「被災地」、仮想化しきれない残余としての身体。時には難解に思える文章を《読む》ことを通じて、自分や社会に起きていることへの気づきを得、空気に流され思考停止に陥ることから距離を置く。10年代を、そしてこれからを生きる私たちへ向けて書かれた批評がそこにあります。

最後に、本企画と深く関わる次の一文を引用しておきます。

現代は「機械と人」、「虚構と現実」、「情報と身体」の区分が融解しているように思いやすい状況に人間が置かれている。藤田直哉（2013）『虚構内存在』作品社、p.14.

【藤田直哉氏の紹介】

1983年生まれ。批評家。日本映画大学専任講師。東京工業大学社会理工学研究科価値システム専攻修了。博士（学術）。

著書に『地域アート：美学／制度／日本』（堀ノ内出版）、『娯楽としての炎上』（南雲堂）、『虚構内存在：筒井康隆と〈新しい《生》の次元〉』（作品社）、『シン・ゴジラ論』（作品社）、『新世紀ゾンビ論』（筑摩書房）などがある。「東日本大震災を経験した人の言葉を集めた文芸誌」を作るため、クラウド・ファンディングによる資金調達でのプロジェクトにより『ららほら』（響文社）を出版。

朝日新聞で「ネット方面見聞録」を連載中。